

ムシたちの夏（夏空に舞う③：ゴマダラチョウ）

ゴマダラチョウは、タテハチョウの仲間でオオムラサキを小さく地味にしたような蝶です。

また、以下の点がオオムラサキと異なっています。

1. 成虫は、初夏と盛夏以降の2回発生すること。
2. 都市や住宅地の公園でも観察できること。つまり「都会派」？の蝶なのです。



ゴマダラ豆知識：発生時期により翅の裏の模様が異なります。

初夏：白い部分が多い

盛夏以降：黒い部分が多い



5月中旬



7月上旬

<庭にやってきたゴマダラチョウ>

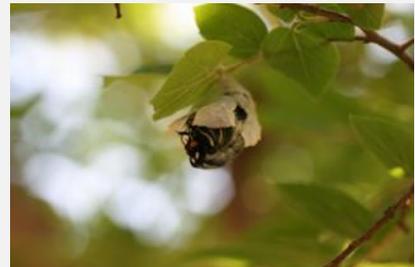
私は、ムシが大好きで庭を観察・繁殖できる場所にしようと考えていました。庭を作る前に自宅周辺を観察したところ、ゴマダラチョウとタマムシが飛んでいるのを確認できました。そこでエノキを植えることにしたのです。エノキを植えてから数年後、エノキの葉の裏に蛹を発見しました。この時の感動は、今も忘れられません。右の羽化の様子は、庭のエノキで撮影したものです。



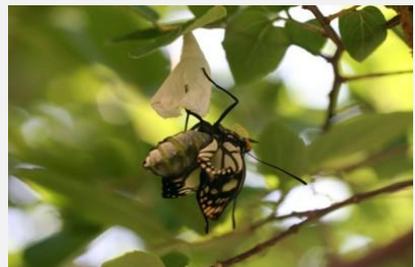
<羽化の様子/5月中旬>



6:30 蛹発見から約10日、蛹の中に黒い模様が透けて見えるようになりました。



6:58 頭の後ろの部分が割れ、頭が出てきました。



6:59 足が抜けると同時に、蛹の殻にぶら下がりました。お腹の太さに注目です。



7:08 体を安定させて、体が乾くの待ちます。太かったお腹が細くなっています。口(口吻)が2本に分かれています。



7:09

朝日が葉の隙間から注ぎ始めました。その光は、羽化したばかりの成虫を照らすスポットライトとなりました。まるで、これから夏空を舞う成虫の誕生を祝っているように思えます。



7:50

<私のゴマダラチョウの愉しみ方>

1. 逆光で見る

翅を表から見ると白と黒で地味ですが、裏から空を背景に見ると、白い模様が透けて見えてとても綺麗です。



2. 樹液酒場で「おだやかな性格」に触れる

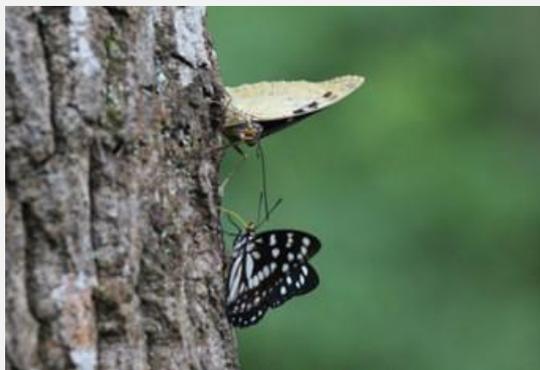


樹液酒場では、場所をめぐって積極的に争うことはありません。和を重んずる性格のように思えてしまいます。

左上：2頭で樹液を吸っています。一つのグラスにストローを2本入れて飲むカップルのように見えます。

左下：オオムラサキの機嫌を損ねないように口（口吻）を最大限長く伸ばしています。オオムラサキとの体格の差が大きいことがわかります。

右下：アカボシゴマダラに追い立てられています。戦えば互角かもしれませんが、戦わないのです。



3. 予想外の出会いに驚く

デイパックにしみた汗にやってきました。



エノキに発生したアリマキの甘露を吸っています。



西野 孝法 (千葉市)

美しい房総の自然と災害

1 孤立のおそれある集落が約500！

つい先ごろ(4/20)、NHKが「能登半島地震で多くの集落が孤立したことを受けて、千葉県が地震や大雨で孤立するおそれがある集落の数を調べたところ、およそ500(速報値として)にのぼることがわかりました。」「千葉県は、地震や大雨による土砂災害や津波、それに液状化などでどれほどの集落が孤立するおそれがあるか、県内30市町村の958集落を対象に2月から調査を行いました。」と報じていました。30市町村の詳細は明らかではありません。因みに、現在の県内市町村数は54市町村となっています。

写真1は、『九十九谷』として有名な、鹿野山からの房総丘陵の景観です(千葉県公式観光サイトより)。この美しい景観(地形)の中に、多くの集落の孤立化の危険性が潜んでいる、と言って良いのかも知れません。



写真1：九十九谷(千葉県公式観光サイトより)

2 令和元年の災害

4年半前、令和元年秋の台風及び大雨による千葉県内の災害について、千葉県は『令和元年房総半島台風等への対応に関する検証報告書』の中で、以下のように記しています。

「初期段階では、住家被害などの全容がつかめず、甚大な被害が発生したことを確認するまでに時間を要し・・・」。「過去に本県が経験した災害に比べて非常に大きな被害をもたらすと同時に、これまで本県が経験した災害とは異なる事象が発生」。「特徴的かつ稀有な事象が三つ・・・(中略)・・・暴風域が非常に局所的であり、急激に風雨が強まる・・・(中略)・・・大規模な停電が長期にわたり発生し・・・(中略)・・・三つの大きな災害(台風15号、19号、10/25の大雨)が連続して発生し」等々。

ここでは、房総丘陵の小規模(低標高)ながらたいへん複雑な地形が、激甚災害と災害復旧の困難に繋がった大きな要因であることを物語っています。

写真2は、被災地へ支援物資を届ける途中で見かけた、南房総市内国道127号線沿いの斜面林の状況です。

夥しい数の樹木が、幹折れや根折れ(根っこごと地面からはがれ倒れること)で倒れている様子が窺え、当時の雨風のものすごさが想像できます。



写真2：強風による風倒木被害の状況(南房総市内、令和元年9月13日、筆者撮影)

3 茂原公園でも起きていたこと

写真3は、令和元年10月25日の大雨の折り、茂原公園の通称『道表山』南面で発生したがけ崩れの状況（高低差20mほど）です。『もばら風土記シリーズ6茂原地方の地層』によれば、この付近は上総層群の中の長南層に当たるそうです。この折り、同公園内では、他の個所でも小規模崩落が発生していました。また、同時期、茂原から内房方面に至る道路沿いでも、驚くほどに多くの所でがけ崩れが発生し、斜面崩落跡の同じような光景（地層？）が見られたことを記憶しています。

この災害後、市民団体として行政担当者に対し「今後も公園内で、気象の激化に伴って、この度のようなこれまでになかった大きな災害の発生が考えられます。周辺には住宅地や学校もあります。それらのことを踏まえ、SDGsに配慮した公園管理（災害対策）のあり方が必要と思います。」と伝えました。

そして昨年令和5年9月8日、台風13号による再度の大雨。再び『道表山』で、今度は東面で、同規模程度のがけ崩れが発生しました。この折りにも、公園内の他の個所で小規模崩落が発生しました。

困みに、令和元年の災害時の茂原市内での総雨量は222mm（上流域長柄町360mm）、市内でのがけ崩れ50カ所。令和5年の同じく総雨量は405mm（観測史上最大値）、がけ崩れ57カ所でした。市内でがけ崩れが、それぞれ50カ所以上も発生していたことには、たいへん驚きました。



写真3：令和元年秋の大雨による、茂原公園内でのがけ崩れ

なお、『千葉県山地災害の概要』（千葉県HP）を見ますと、過去における千葉県内での主な土砂災害として、「昭和27年と昭和54年の曾呂高田の大規模な地すべり滑動」とか「昭和46年9月台風25号による崖崩れの多発(死者56名)」「昭和62年千葉県東方沖地震による九十九里浜平野に面する台地縁辺の崖崩れ、長南町の丘陵地帯崖地斜面の崩壊の多発」「平成8年の台風17号による伊予ヶ岳の大規模地すべり」などが記載されていますが、何故かそれ以降、近年のことについては見当たりませんでした。

4 私たちにできること

写真4は、令和3年11月に訪れた、清和県民の森、八良塚付近のハイキングコースの様子です。令和元年の災害で、強風で根返りを起こした樹木、右側は大規模ながけ崩れで岩盤がむき出しとなった斜面です。房総丘陵の姿形がそうそう簡単には変わらないと思いますが、気象激化による影響は、決して無視できません。



写真4：清和県民の森、八良塚付近

ハイキングコースの様子（令和3年11月28日、筆者撮影）

決して無視できません。

遙かな時を経て今ある自然の姿・・・そのバランスが崩れてきたのかなあと感じます。そして暮らしへの影響は？

千葉県では『気候変動影響への適応の考え方』として、グリーンインフラの取り組み推進などを掲げています。

さてそこで、私たちにできることは？ここまで読んでくださった皆様、如何でしょうか？

（記：茂原市 望月力智）

クマガイソウとマルハナバチ

佐倉市 坂本文雄

私達が保護しているクマガイソウは4月14日に早咲きの株に初花が咲き、18日にほぼすべての株が咲き揃いました。花数は446となり、昨年より89輪の増加です。

この保護地では2017年の7輪以来、グラフは毎年右肩上がりが続いています。

クマガイソウが蜜を分泌せず、あの独特の袋状の唇弁でハチを騙して只働きさせているのはご存じだと思います。騙される側のハチも学習したのでしょうか、この花を訪れる数は少なく、受粉の確率は1割程度です。

18日のクマガイソウ観察会で、参加者が唇弁の下の穴から花の中に潜り込むハチ見たというので、傍に行くと花が小刻みに震えていて、中でハチが動き回っているのが分かりました。



解説書によれば、ハチは下の穴を押し広げて中へ入れても、出口が閉じるので袋の中に閉じ込められる。しかし、上部にも狭い隙間があって、その隙間から這い出す時に花粉塊が背中に付くというのです。

ならばその瞬間が写せるはずと思い、急いでカメラの用意をしました。直ぐに出て来ると思ったのですが、上の隙間出口辺りに黒い影が見えても出てきません。

袋の底へ滑落したのか、他の出口を探しに戻ったのか分かりません。

このような行動を4~5回繰り返した後で、ようやく前脚が出てきましたが、窮屈そうに藻掻いていて、なかなか外に出られませんでした。

唇弁の上を覆っている側弁に脚が掛かかると懸垂する形になり体が引き出せます。これで背中に花粉塊が付く訳と側弁の役割がわかりました。脱出に成功すると直ぐに飛び去るかと思ったのに、暫く出口の周辺や下の穴の辺りをうろついていました。あれだけの苦勞をしたのにまだどこかに蜜がある筈と執念深く探しているように見えました。

このハチがもう一度凝りもせず別の花へ潜り込めば受粉に成功です。

今回のハチの種類はコロマルハナバチまたはクロマルハナバチの様です。

松虫姫伝説と時代背景

4月6日行う予定で雨天中止になった「松虫姫伝説の里で春を楽しむ」は印旛日本医大駅が集合場所です。副駅名が「松虫姫」です。副駅名は珍しいです。新京成線の「三咲」はフナッシーに関する場所柄から、ときどき「ミサッキー」と副駅名が加わります。

松虫姫伝説の里は過去2回きていますが、松虫姫伝説について「なぜ？京都から印西に」が頭から離れないので、AIを駆使して探してみました。

～松虫姫は奈良時代に聖武天皇（701～756）の第三皇女として生まれた美しい姫君です。彼女は重い病気にかかり、都の名医たちが治療に尽力しましたが、効果はなく、病状は悪化するばかりでした。そんな中、ある夜、姫の夢枕に白髪の老人が現れ、「私は下総の国萩原村（現在の印西市萩原）の出戸の薬師如来の使者です。お姫さまが萩原の里まで下られてご参籠なされば、その病は必ず治るであります」と告げました。姫はこのお告げを父君陛下に伝え、行基僧正の進言により、少人数で道なき道を分けながらの長い旅が始まりました。途中、山賊や大蛇との遭遇もありましたが、姫は萩原の里に到着し、薬師堂を訪れました。姫は食を絶ち、身を清め、薬師如来に祈りました。行基僧正は七仏薬師を造り、姫の病気は奇跡的に治癒しました。しかし、姫は若くして世を去りました。彼女の遺言通り、お骨は下総の国の薬師堂の裏に葬られ、松虫寺が建立されました。

この物語は、姫の冒険と信仰心、そして奇跡を描いています。松虫寺には姫の伝説が残り、七仏薬師像が重要文化財として保管されています。また、姫の乳母である杉自の墓も近くに残っています。～

聖武天皇の時代は地震、凶作、伝染病がはやり、解決策として仏教の力によって国家を守ろうと、東大寺の大仏造立を決め、国分寺・国分尼寺の建立に力を注ぎました。混とんとした時代を救うため、仏教に頼ったということが分かります。国分寺・国分尼寺の建立と病気の治療のため下総の国に出かけるという松虫姫伝説はそうした時代の背景をシンボリックに表しているのではないかと思います。



時代が下って桓武天皇（737～806）の時代には東北支配に力を注いだとされています。坂上田村麻呂やアテルイなどは歴史書にも登場します。

松虫寺のある「印西市の萩原の里も古代日本の東北進出と関連がある地域であり、歴史的な魅力に満ちた因果関係がある」とありますが、具体的な古代に関する記述は見つかっていないようです。

いようです。

腑に落ちないまま、下見に参加しました。松虫寺では住職が境内を掃き清めているところに出会い、ミニ解説していただきました。

境内には古木に着床したカヤラン、七仏薬師像の納められている収蔵庫、室町時代に建てられたと伝わる鐘楼、幾星霜重ねてきたのかといたわりたくなるスダジイなど、いつ行っても見ごたえ満載の松虫寺でした。（松戸市 藤田 隆）

